

## 女って、鋭いなあ

紫野小学校のそばの診療所のそばを通りすぎた時、その病院長に僕と同じ歳の女の子がいたのを思い出した。

同じ歳だが、北大路堀川にある私立の小学校にその子が行っていて、朝、いつも、通学時、すれちがっていた。僕の通学路にその子の家があり、その子に通学路に僕の家があり、家を出るとき、家の前でよく合った。

その子を思い出すこと自体、自分で自分が不思議だった。三年間全く、忘れていた子だった。

まだ、僕が鼻たれ坊主の小学校二三年の時から、小学校六年まで、毎朝、通学時に顔を合わせていたが、一度もしゃべった事がなかった子だ。

「おすましのお嬢様」と、通学仲間は、いつも無視していたが、六年もおわりに近づき、僕はよくその子と目があった。

中学になっても、その子はよく家の前を通っていた。

中学になって、僕が紺の制服を来て、朝、自転車で家を出るとき、家の前で会うと、今度は僕がすましていた。

そういう事を思い出しているうちに、やっと、なつかしい紫野の雲林院町に入った。

大徳寺の南側、電車を東に歩いた。たえちゃんの家があった。